

「命の大切さ」を育む教育のための三つのステップ

1 三つの言葉

「命の大切さ」を育む教育、との課題が本誌の編集部から届いたときに、次の二つの言葉とその情景が脳裏に蘇りました。

- ①「あれ、かたつむりがなめくじに……」
②「お墓っておもしろいね……」

ともに一九九〇年代初め、誕生期の生活科の活動で出会った子どもたちの言葉です。もう一つ紹介します。本稿の準備をしているときに、文部科学省の招聘で昨年10月に私の研究室に留学してきたソウルの初等学校の崔松姫（チェソンヒ）先生の言葉です。

- 「なぜ加害者を罰しないのですか？」

彼女の研究テーマは「日本の学校の『暴力』への対処方法」です。関係する報道記事をゼミで検討し

「かわいそうね、お墓をつくってあげようね」というやさしい声とともに、女性がその子を抱きかかえました。一年生の活動支援のために参加した養護の先生でした。女の子の日から涙が溢れてきました。

この光景が生活科の価値を感得する原風景になりました。「命の大切さの内発的な覚知と表現」という、生物としての「ヒト」が、支え合う「人として」生きるために獲得しなければならぬ、最も大事で最も難しい課題を、見事にクリアしたからです。

四苦八苦という言葉があります。現在は目的達成のために苦難を承知で努力する姿を示す言葉として用いられますが、原義は生命の尊貴を簡潔に示す仏教用語です。生あるものが避けえない生老病死という四苦に、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦を合わせた八苦です。先の四苦は生命の尊貴が損なわれる事象のカテゴリーを、後の四苦はその現実化の経緯と心身の顕れの特徴を示しています。

この四苦八苦の原義から、私は「命の大切さ」とは、命が傷つき失われることへの悲しみが、それを表現する心身のかたちとセットで、子どもの心の奥深く刻印されることで育まれることを学びました。育むとは内発性、能動性を重視する概念です。深い悲しみは、文字通り心中深く培われるものです。そ



静岡大学教育学部 教授

馬居政幸

ているときに、私への問いが③です。

この三つの言葉をてがかりに課題に応えます。私が考える「命の大切さ」を育む教育の三つのステップ（段階）を示唆しているからです。

2 心をかたちにする

九〇年代初め、新教科生活科の実践方法を求めて、全国の小学校で研究授業が公開されていた頃のことです。研究者として参加した小学校の校庭で、子どもたちの活動を見ていた私の耳に届いたつぶやきが①です。何のことかわからず、声の方向に顔を向けたとたん、左手にカタツムリの殻、右手に殻から引き抜かれたかたつむりを持つ女の子の姿が目に入りました。私は言葉を失いました。ところがその瞬間、

れ故に、心の外に発現させる契機や表現方法を内面化しなければ、命の大切さを現実の行為に顕せません。内側から沸き起こる感情に私たちを与えるモデルが必要で、これが第一ステップです。

悲しみは時に憤りや怒りの心に転換します。それを向上心に再転換するモデルの内面化が必要です。悲しみを楽しさや慈しみに広げる道に導くモデルも求められます。これらがモデルの条件です。先に紹介した養護の先生はどうでしょう。児童の涙は先生の悲しみと慈しみの心が一体となった言葉、声色、表情、目線によって生まれたと思います。やさしく抱きかかえることで、困惑する心に悲しみの意味と言葉とともに安心感を伴った慈愛の心を伝えたでしょう。もし、叱責の感情と表情を伴う「かわいそう」という言葉であれば、どのようなモデルを入学間もない児童の心に刻印したでしょうか。

先の例に対して、児童の内発的（意図せざる）行為に、担任でなく支援で参加した養護の先生がかかわることで生まれた特異（偶発的）な学びとみなす方もいるでしょう。しかし、教える内容（教科書）、場所（教室）、人（教師）が事前に定められた教科の教育では、偶発性は教育活動の外におかれます。既存の座学から離れることを試みた生活科の活動だっ

たからこそ、意図せざる行為を最も重要な学びの機会に転換できたと判断しました。

他方、日常生活の様々な場面で「命の大切さ」を基準に判断・行動できるには、その基準を多くの人たちが共有する仕組み（社会制度）が必要です。それを意図的に教える課程（学習内容）と過程（学習方法）の構築が課題になります。第二ステップです。

3 社会の約束（制度）を教える

学校の裏山を活動の場にした二年生の秋探検の公開授業に参加する機会がありました。九〇年代半ば、生活科の理解が進み、子どもの自由な活動が奨励されるようになった頃でした。子どもたちの活動は動物の観察から遊びのツールを求める探検に広がり、見つけたのが墓石を障害物に見たてたクロスカントリーコースでした。裏山の一角が墓地になっていたので、最初が墓地を走りぬけるだけでしたが、墓石から墓石に飛び冒険を競い始めました。私は違和感を覚え担任の先生を見ました。笑顔でした。

授業後の研究会で、墓地での活動の是非が話題になりました。結論は子どもの意欲の容認でした。私は異議を述べました。墓地は四苦のなかで最も深い悲しみと結ぶ死への恐れを安楽への祈りに転換する

も、愛する人と別れ（愛別離苦）、嫌いな人に会い（怨憎会苦）、我慢を強いられ（求不得苦）、心身の自由な表現の禁止（五蘊盛苦）との四苦は、教室で日々繰り返されています。「命の大切さ」を阻害する四苦八苦は学校の日常です。問題は学校の役割かどうかではなく実践方法です。第三ステップです。

4 変化と多様性へのまなざしを

冒頭の③の質問の前に、崔松姫先生はソウル市教育庁の「2013学校暴力予防および根絶対策」から「校内暴力に対する方策」を報告してくれました。その方策の一番目に「加害生徒に対する厳格な措置」がおかれ、i 学校で暴力が発生すれば直ちに加害学生を隔離措置、ii 報復行為等を厳正措置、iii 学校暴力関連の懲戒事項を学校生活記録簿に記載、との三点が具体策として示されていました。

暴力は「命の大切さ」に反します。韓国では「いじめ」を学校暴力に含め、予防と根絶の第一は加害者の処罰です。日本はどうでしょう。暴力をいじめに含め、加害と被害の主体を曖昧にして、被害を避ける方策に論点を移動させることが特徴です。

どちらが正しいかが大事なわけではありません。「命の大切さ」への同意は共通でも、具体化の段階では

空間（聖域）です。墓標は彼岸の死者と此岸の生者の心の交流（儀礼）の場です。ともに死の厳肅さを迂回した生の尊さを確認する仕組み（儀式）です。

核家族化で身近な人の死を経験できないため、命の大切さを子どもたちが実感できない、との批判があります。間違っています。生老病死にかかわる儀式はむしろ増えています。メディアは巨大で華美な儀式を見学させます。失われたのは、生老病死という苦を生への意欲に転換する、儀礼と儀式の制度を「命の大切さ」に結びつける教育の課程と過程です。墓石を踏み付ける子どもに伝えるべき言葉と心を失ったのは、教師と学校の方ではないでしょうか。

それは家庭や地域の役割のはずと考える先生もおられるでしょう。その通りです。生まれ育った地縁と血縁のなかで一生を終える社会、との条件があればですが。現代日本では、6歳から15歳までの日本人に対する価値と知識と行動の型の強制を法で承認された制度は、公立小中学校だけです。かつてのイヤムラが担った所属集団への帰属を優先する意識と行動の社会化（学習）の機能を受け継ぐ制度は学校教育です。教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間に、「命の大切さ」を共有・確認する儀式と儀礼の意味を教える機会は潜在しています。何より

変化と多様、という事実謙虚になることです。「命の大切さ」の教育は子どもが生きる学校の外の未来の常識に合うことが必要条件です。未来は多様で変化します。だからこそ、命を大切に作るゆるぎない原型を心の奥深く育む第一ステップが重要です。他者と共有・確認し合えるための表現の型（儀式）と意味付け（儀礼）を教える（社会制度の内化）のが第二ステップですが、この段階で生涯を過ごす社会は、今なお世界には少なくありません。しかし、現在と未来の日本で生まれ育つ人々には第三ステップが必須です。「命の大切さ」の基準と表現の方は、身に着ける衣装のように、国、社会、文化の時機に応じて選択する柔軟さが求められます。

その結果、問われるのは子どもではなく教師自身の「命の大切さ」に対する感情の深さ、言葉の確かさ、表現の豊かさです。子どもの生きる未来が多様で変化するなら、教える育てる基準も変化と多様を組み込む必要があります。そのスタートカリキュラムとして、教室の中で日々苦闘する子どもたちの四苦八苦を、支え合う命の輝きのエネルギーに転換する課程と過程を見出すために、三種のステップを活用して、教師（自分）の中にある「命の大切さ」への意味付けと行為の変容性と多様性を省みてください。



特集記事の写真より

巻頭言

アンシエー又藍を訪問して欲しい 法政大学大学院教授 坂本光司 4

特集

「命の大切さ」を育む教育の推進 6

提言

「命の大切さ」を育む教育のための三つのステップ 静岡教育学部教授 馬居政幸 8

■わが校のとらえ

かけがえない存在だと思える環境を整える 伊豆市立中伊豆小 山本順也 12

自尊感情を高める一年間の実践 静岡市立中田小 山口麻子 16

豊かなかわり合いの中で 個が響き合う授業を目指して 浜松市立富塚西小 生熊 周 20

自他を大切に教育を推進するために… 島田市立島田第一中 杉本文孝 24

互いを尊重し、自己肯定感を持って生活する 森町立旭が丘中 山崎扶美代 28

生徒の相談に生徒が応えるピア・サポート 県立浜松江之島高校 宮地幸子 32

●連載●

保護者と上手につながる①

不安でも面倒でも、一歩先の行動を教師が起してみる 大阪大学大学院教授 小野口正利 36

アンケート●教職員30人に聞きました「テーマ」私の座右の銘」

38

教職員のための情報モラル・ICT活用講座①

子どものスマホ事情とその指導 静岡大学教育学部専任講師 塩田真吾 42

まちの伝言板

伝わりしもの 焼津市 中島礼子 44

きざまれた思い出 牧之原市 榛地夏代 44

たすきがけの子育て 伊東市 泉 光幸 45

先生が教えてくれたこと 三島市 柴田寿子 45

教育活動Q&A:学級経営こんなときどうする? 静岡県総合教育センター 46

一言

気付けて育てる 御殿場市立神山小 山下清春 48

蛍雪 菊川市立堀之内小 角皆裕士 49

私たちは一人で生きているのではない 浜松市立笠井中 竹内 勉 50

農業高校に学ぶ 県立静岡農業高校 永井 正 51

温かい人間関係と響き合う喜びを築く 三島市立南小 神田初美 52

感性を育む環境づくり 牧之原市立萩岡小 櫻井真弓 54

地域の方々の農園活動 浜松市立北浜東部中 加藤陽介 56

わかりやすく伝えることの大切さ 県立静岡視覚特別支援 (静岡盲学校) 今村光宏 58

174

こんな授業 やってみました 小1音●星空の様子に合う音を演奏しよう 浜松市立藤原小 松井康子 60

小3体●自分の目、友達の間で技を確かめ、高める 富士市立藤岡小 吉田琢真 61

小5体●表現運動して楽しい! 考える授業を目指して 焼津市立大井川東小 赤堀宏光 62

中 英●反復! 創造! テキスト構文の指導 沼津市立第三中 本田美智子 63

174

表紙絵解説

退職互助(静岡支部) 鈴木英利 64